

アンデスの村の援助と水問題 —高所住民の環境認識ノート(4)—

古川 彰
中京大学社会学部

いまや国際的な援助はどこにでもはいつている。今回訪れたエクアドルとボリビアのアンデス山中の村でも、政府やNGOのさまざまな援助機関によって事業がおこなわれている。今回は予備知識もないままに、それぞれわずか10日ほどの短期間の訪問であった。そこでここではその村で暮らす人々がかかえる問題を、水に焦点をあてながら簡単に記述する。

1 はじめに

今回はヒマラヤから少し離れて、南米アンデス高所に居住する住民のことを考えてみたい。はじめてアンデス(ボリビア)のアルチプラノを訪れて、あまりにチベットと景観が似通っていることに驚いた。高度4,000メートルにひろがる広大な大地。地平線を淵どるようにならぶ雪山。そしてなによりも寒さ(というより気温の日較差のおおきさ)と乾燥。

アンデスに暮らす人々の帽子を除けば服装や色彩の感覚までもが似通っている。たしかにこの気温の変化の激しい紫外線の強い世界では厚手の身体全体をおおってしまうような服装が合理的だし、乾燥した褐色の世界には原色の模様が映えるし必要だろう。

だが私たちがエクアドルのヴィルカバンバに続いて訪れたチチカカ湖岸の村ウワタハタは大都市ラパスに近いこともあって、さまざまなかたちでの近代化がすすんでいる。風景の同質性の下で確実に変化ははじまっているのだ。そもそもスペイン植民地下で彼らの暮らしは、キリスト教化とともにおおきく変化させられきたのであって、変化はいまにはじまったことではない。これまでみてきたチベット、ネパール山岳部ともにラマ教の文化圏にあって、早い時期にラマ教化されてきた。

このキリスト教化とラマ教化による文化変容と近代化の問題は興味深いものであるが、ここではわずかな期間の見聞から得られた、最近の生活変化のメモである。とりわけ彼らがかかえている生活問題に焦点をあててみることにしたい。

2 ヴィルカバンバとウワタハタ

今回、わたしたちが訪れたのはエクアドルの南部、ペルー国境にちかいヴィルカバンバとボリビア・チチカカ湖畔のウワタハタである。ともにアンデス山中の村ではあるが、ヴィルカバンバはアンデス山脈が一旦高度を下げた1500メートルほどの高原状のところにあり、ウワタハタはアルチプラノと呼ばれるアンデス山脈中の4,000から5,000メートルの高原にある。当然、生活条件はまったく異なり、桃源郷とでもいえるようなヴィルカバンバに較べウワタハタの暮らしは過酷である。

ただ都市からの距離でいえばヴィルカバンバもウワタハタもバスで1時間ほどのところに州都(ロハ)と大都市(ラパス)を控えているので、現在ではその影響を強く受けている。人々の移動性は高く、子供たちの多くは村を出てかなり遠隔の地で仕事をみつけ、結婚して暮らしているのは今に始まったことではないが、都市との行き来が頻繁になるのはやはり道路と交通機関の発達によ

るところは大きい。

3 ヴィルカバンバの暮らしと村の問題

エクアドルの首都キトからヴィルカバンバのある州の州都ロハに飛行機で飛び、飛行場から山道を車で2時間ほどの山間に緑濃いヴィルカバンバはある。

1) ルイスの家族と一日

今年61歳になるルイスは村のクバリブレと呼ばれる上水道の配水施設の管理の仕事をしている。家族は妻のテレサ62歳、長女のセシリアは結婚しているが夫はグワヤキルで仕事をしている。セシリアの子供たち3人、長男のウマルメ30歳はロハ、次男が家の農地を耕している。次女のビルマはヴィルカバンバのなかで結婚している。三女のテレサは首都のキトで、三男のギジェルモはロハで仕事をしている。それから末っ子で4女のネリーは20歳。すでに結婚しているが夫はクエンカで働

いているので、いまでもこの家でくらしている (図1)。

つまり子供は3男4女の7人。村の平均より少し少なめかもしれない。配水施設の少し上に住んでいるオヘラの家は4男7女だし (図2)、川下のマルチェナの家は7男2女だから。しかしどの家でも子供たちは近くはロハから遠くはキト、グワヤキルまで出て行ってしまっている。「ここに住んでいる限り、食べるものに困ることはないが、農業と畜産以外に仕事がなく、これ以上でもこれ以下でもないという暮らしが続くだけだから、子供たちが出て行くのは仕方がないだろう」とルイスは気にとめる風ではない。昔からのことなのだ。

ルイスは朝4時半におき、すこし畑にでて7時に朝食とる。朝食後仕事場にでかけて昼食には帰ってくる。昼食は1時頃。すこし昼寝をして夕方5時まで仕事。帰宅してすぐに夕食。9時頃には床につくことがおおい。

図1 ルイスの家族

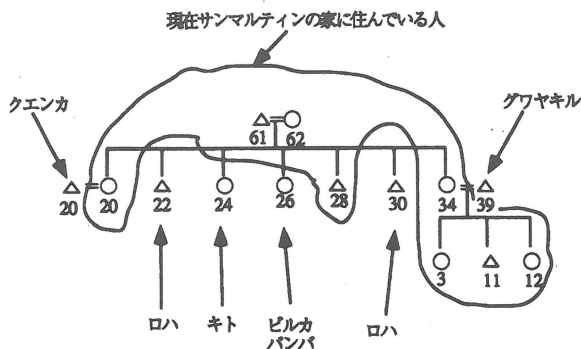
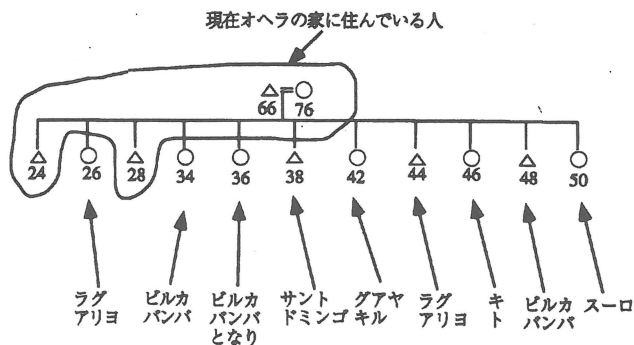


図2 オヘラの家族



2) 家計

ルイスの一カ月の給料は水道局からの83,000スクレだ。そのほかに1ヘクタールほどの土地がある。食費は「だいたい自分で作っていて、購入するものといえば米、砂糖、豆とラード位のものだから月に8,000スクレもあれば十分だ」。あとは電気代の8,000スクレ、水道代の3,000~3,500スクレが決まっているもの。月に均せば衣服代が20,000スクレ、慶弔費が10,000スクレ。教育費は無料だし、お酒も飲まない。おおきな冷蔵庫は600,000スクレした。たまにこういう大きな出費があるが普段はとにかくお金はあまりいらぬ。一月のプリメーロ・デ・メーロからアーニョ・ビエボまでいろいろ行事はあるが、だからといってその度にご馳走するわけではないから、クリスマスとか正月のご馳走がたまの物いりくらいのもなのだ。

3) 暮らしと水

ところでヴィルカバンパで私たちが泊まっていたホテルで「アクア・ヴィルカバンパ」というミネラルウォーターが売られていた。ヴィルカバンパの川の上流にある氷河湖に源をもつ湧水がいたるところにあるというのだが、実際にはこの村の人々の生活用水はその大半を上水道に頼っている。

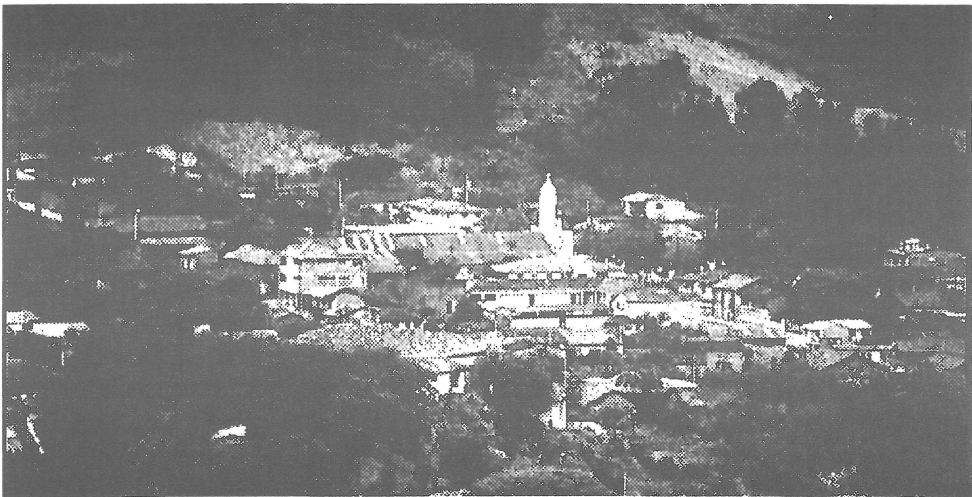
1979年に最初の上水道ができ、1987年にさきのルイスが働いているクバリブレとして更新され

た。上水道はこの一つだけだが、かなり村の外れまでこれがカバーしている。各家にはメーターがあって15トンで300スクレというところらしい。この上水道ができるまではみんなリオの水を使っていたからけっこう川の使い方には気を遣っていたのだが、上水道ができて川が汚くなるというのはどこでも同じで、この村でも同様の事態は始まっている。しかも上水道ができると、どうしても水を川から汲んできたときには利用する量が桁違いに増えるので、その排水はいきおい川に流されてしまうことになる。そうなる困るのは下流の家である。しかも下流に、まだ水道が来ていないときにはそれはかなり重大な問題を引き起こす。この平和そうな村にもそんな問題が起こっている。

マルチェナ(65歳、女)の家はヴィルカバンパのなかでもリオグランデと呼ばれる大きな川の方にくだっていく途中の、つまり低いところにある。家から30メートルほどのところにリオグランデにそそぐ小さな川があつて、それがマルチェナの家の生活用水のすべてだ。その水を汲んで飲み水や料理に使い、その川で洗濯もする。8年半ほど前、川の上流に観光用の動物園ができてから、この川が汚くなった。そのまえから少しずつは汚くなっていたが、8年前に子供が病気になる。

村では10年ほど前に下水管をつくって延ばし、最初は草原に流し込んでいたが、マルチェナが住んでいる下流のクカナマという地区から不満が出

ヴィルカバンパ遠景



始めた。現在はクカナマ地区に上水道を計画中だ。だがクカナマに水道をひくには2,000万スクレも必要なのでいつになるかわからない。

マルチェナとしてはできるだけ朝早くに水を汲むようにはしているけれど、間に合わないくらい汚くなっている。「水道なんかより川がいい。水道をひいてもらわなくてもいいから、川の水をきれいにするようにしてほしいものだ」と半ば諦め気味に川まで私たちをつれていってマルチェナがいう。どこの国も、ある時期にこの問題にぶつかる。この問題を上水道を延長することで解決するのは簡単だが、その時には川は終りだ。この老婦人の言葉にすこしでも耳をかすことができれば、ヴィルカバンパの水は案外ながく「いい水」のままでいけるかもしれないが、どうもそんな「余裕」はなさそうだ。

4) 村の問題

なにによって長寿の村伝説ができたのかは私にはしかとはわからないが、少なくともよい水は健康には不可欠だ。現在の若者たちが私たちとそれほど変わりのない暮らしをしている様子を見ると、長寿も伝説のかなたに消えていくだろうことは想像に難くない。日本でも水の歴史を追ってきた私には、水利用の上に見たようなながれがそのことの象徴に思える。

ルイスの長女セシリアはこの村の問題はまず仕事がないこと、次ぎにアグアセルビーダス(下水道)がないこと、そしてラグーナ(氷河湖)の水が足らなくなってきたことだという。仕事がないのは昔からのことだが、この10年水の問題がこの村でいちばんよく語られる問題だという。水の問題でクカナマとかリンデロスという村の中の地区から不満がではじめて、すこしぎくしゃくしている。この問題では州都のロバを越えて首都のキトにまで地区の長が訴えにいくというような問題にまで発展しているのだそうだ。

村の問題に関してルイスが付け足した、村には耕地が足りなさすぎるし、若いものが遊ぶところもない。サッカーをする広場もないのだから。だからといってルイスはここを出て行く気はない。気候はいいし、少しくらい水は汚くなったかもしれないが、いまでも甘くておいしいし、土地の水

はけはいいし、なによりみんなトランキーロ(静か)だから。それに近頃では交通の便もよくなった、と。

たしかに、ヴィルカバンパが変わりはじめて20年、いまはそんな時代なのだ。いずれ遠くない時期に、さきのささやかなマルチェナの抗議がおおきな意味をもち始める時が来るだろう。

4 チチカカ湖畔の村の問題

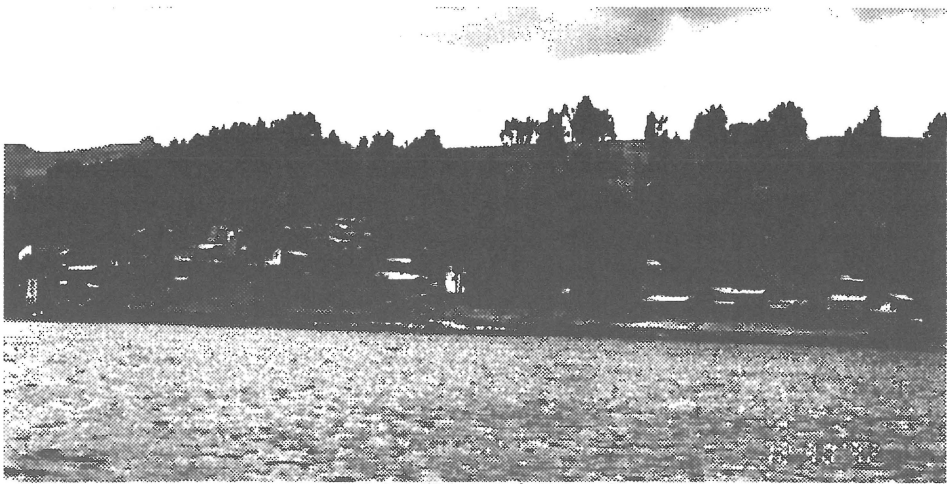
ボリビアの実質上の首都ラパスはアンデスの大高原アルチプラノのなかのおおきな裂け目にある。そこに町がつくられたのは、少しでも高度が低いという理由に他ならない。アルチプラノにあるエル・アルト空港の高度は4,000メートル、ラパスはすり鉢の周りを巻くようにして下ったところにあって3,600メートル。このわずか400メートルの差がこの高度ではおおきな意味を持っているのが旅行者には実感できる。

ちょうど空港からラパスへ行くのとは反対の方向に1時間ほどいくとチチカカ湖があつてウワタハタはその湖岸の村である。湖畔にあるのにここはなんと乾燥したところなのだろう。湖岸には芦(トトラ)があり、樹木もあるのだが全体に茶褐色の村の印象はあくまでも乾燥である。

この村で学校の先生をしているニコラスは50歳、。家族は妻のベニータ(45)、ラパスの大学に行っている長男(24)、近くの村に嫁いだ長女(22)、やはりラパスの師範学校に行っている次男(20)、アマゾンの方に下ったベニ州のトリニダードで働いている三男(18)をはじめとして7男2女の構成である。ほかに無くなった子供が一人いる。

朝は5時ころおきて、7時にパンとコーヒーの朝食、昼ご飯は12時ころ、夕方5時ころにお茶を飲んで、夕食を8時ころにとる。就寝は9時ころ。訪れた日の昼食はカラチという魚とジャガイモ玉葱、マイズを煮たもの、また夕食はマカロニ入のスープとジャガイモと豆とニンジン、牛肉を塩味で煮たものであった。

教師としてのサラリーは300ボリビアーノ(100ドル程度)くらいで、まったく暮らしは楽ではないが、家には牛、豚がそれぞれ2頭、ロバ1頭があり、500メートル四方程度の農地で、パパ、キヌア、アパス、マイズ、オーカ、セボージャ、セ



チチカカ湖からのウワタハタ

バダ、アルベルハなどをつくっているのです。購入するのは、米、砂糖、肉、魚、牛乳と祭りのときのビールとあとはたまに洋服くらいだから、なんとか子供たちを学校にやっている。鶏肉は高いので食べない。

この村には4年前に英国とカナダの援助でつくられた水道があるが、雨が降らないと出ない。使えるのは11月から2月ごろの雨期に限られている。だからその他の月は結局いままでどうり自噴の井戸を使っている。自噴井戸は村に4つあってけっこうよく出ている。それを飲んだからといって問題はないのだが、各家の排水はそのまま垂れ流されているので、とくに水道ができてから排水量が増えて問題が出始めている。

飲み水の方はまだしも垂れ流しの排水が湖に流れ込み、近頃はその汚れが目立ち始めている。私たちが泊まっていた宿の長男エリックはラパスのカレッジをでて、いまはこのホテルの切盛りをしているが、数年前から自分でつくった芦舟でチチカカ湖一周の調査をする計画をすすめている。計画書を日本大使館などにも出してみたが、返事がなくて資金計画の目処がたたないので、船の設計図の段階だが。

そのエリックによればこの村の問題は仕事がないこと、高等教育機関がラパスに集中していても若者が村を離れてしまうことは、問題は問題だが、それは村の問題というよりもっと大き

な社会の問題だ。それよりも水の利用が水道がついて随分変わってきたのに下水道がない。排水がチチカカ湖に垂れ流しになっていて、最近では水が汚くなってきた。これは急がないと湖がだめになってしまう。それと来てみてわかったと思うけど道にまったく街灯がなくて夜の道は真っ暗であぶない。こんなところが今、自分が感じている問題だとインテリらしい答が返ってきた。

またここでも排水の問題だ。先のヴィルカパンバも前回のネパール山岳部でも排水の問題があげられる。しかもそこにいつも援助絡みの水道化がその誘因として働いているようなのだ。たしかにここでも1985年の大洪水が生活用水問題をクローズアップし、それをきっかけに水道化が要望されてきた経緯はある。だが、水道にはきちんとした排水システムが必要だということを私たちは十分に知っているのだ。たしかに水道のインセンティブと下水道のそれとは、さしあたりの問題場面ではまったく較べものにならないのだが、これは援助する側の生活観、環境観、援助観の問題だろう。

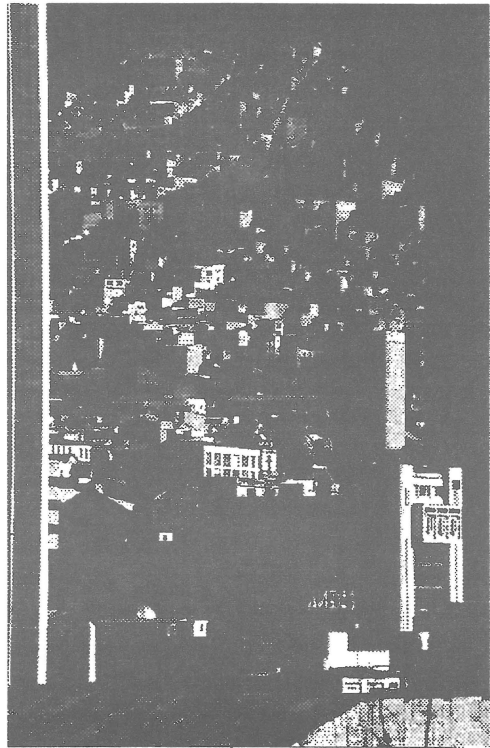
5 おわりに

ラパスはすり鉢状の底に町が展開しているので生活用水の確保は重大な問題だ。水は低い方に流れるから問題がなさそうなのだが、じつにだから問題なのだ。かつては町の最低部を流れるラパス川（チョケヤブ）が生活用水を供給していたが、

当然のことながら排水もそこに向かって流れ込んでくる。大げさに言えばそこにしか流れるところがないのだ。二世紀ほど前には鉱山都市ポトシとリマとの中継ぎの町にすぎなかったのが、急激にふくれあがり現在では百万人をこえる都市になった。そのあいだにラパス川は汚れ、生活用水には使われなくなる。そのかわり、早い時期にアルチブラノの三つの水源 (Jampaturi, Incachakca, Milluni) からパイプラインでひかれてくる水道ができた。そのかわりラパス川はますますその汚れを増すことになってしまった。

援助関係のラパス支所長にいわせれば、はやくラパス川に蓋をして完全な下水道にしまえばいいのだということになる。ラパス川を下水道にするという発想は突飛なことではない。援助とはそういうものだという考えの表現にすぎない。エリックが心配していたように、じつはラパスの水源となっているところもまた同様の汚れが進もうとしているというのに。

国際的な援助機関はすでにそのことに気付いているし、援助の方向を変え始めている。とはいえトータルな援助には莫大な資金が必要だし、援助の効果が見えにくい。その見えにくいものに金をかけるということのコンセンサスはまだまだできていないように見える。



ホテルの窓からのラパス